

ボナパルティズム論から私論へ

——西川長夫の「国民国家論」と植民地朝鮮——

沈 熙燦

1. 韓国とともに「国民国家論」を読む

ともかくにも、「全くこんな国があるか」とか「世の中ってどうなってるんだ」といった通俗的な問題意識を、少しでも高尚な哲学的問題に昇華させることができる人なら、読みながらわくわくするだろう。市民意識の徹底した近代的人間なら、「国家の解体後の生存と安全、福祉に関しては誰とどのような契約を結ぶべきか」というけんか腰の問いを発しつつシニカルに読むことができる。国家と近代、革命と脱近代、文明と文化、国家システムと世界体制など、人文社会系の絢爛たる用語がもれなく登場する一種の批評集ではあるが、原稿用紙4枚が1頁に収まる形式になっているため、頁が早くめくられる達成感はある。(李雄賢, 2002)

西川長夫の著述が韓国ではじめて翻訳されたのは2002年1月のことであるが¹⁾、上記の引用文はそれに対する最初の書評から抜粋したものである。韓国学界の初の公式的な反応ともいえるこの書評は、西川の議論が受容される過程で経ざるをえなかった屈折を現している。悪意すら感じられる書評の内容に関しては触れずにおくが²⁾、とりあえず「頁が早くめくられる達成感」という皮肉な表現に注目して頂きたい。この表現は、西川の議論がその固有の文脈のなかで検討されず、簡単に「めくられた」ことの隠喩として読み返しうるからだ。

評者が——凄まじい誤読にもかかわらず——頁を早くめくることができたのは、当時の韓国学界の雰囲気とも関係している。マルクス主義が90年代を境に退潮していった韓国社会では、ナショナリズム批判と植民地経験に対する再認識が、欧米の理論の輸入とともに高揚していたが、西川の議論もまたそのような風潮のなかで主に「国民国家論」を中心に紹介された³⁾。そこで西川の議論は欧米の理論に引き寄せる形で理解され、国民国家の構造的同質性や、国家イデオロギーの全能な力の主張がその本領であるかのように受け入れられた。

B・アンダーソン、I・ウォーラーズテイン、E・ホブズボームなどと入り混じった形で紹介された西川の議論は、構造主義に立脚しているため韓国社会と日本社会の差異が曖昧になるばかりでなく、国民国家への代案を提示することもできない、という批判を受けた。甚だしくは、「国民国家の相同性」に関する論調が、「日本の右翼知識人」とも通じあう主張として曲解される場合もあった⁴⁾。これでは、「国民国家は植民地主義の再生産装置である」「国民は必然的に多少とも植民地主義者である」(西川, 2006: 268)という西川の重大な訴えも、近代性一般の問題として日本の植民地主義を稀釈しようとするものだと誤解されかねない。

「韓国の歴史的現実や韓日関係の現実から生みだされる、私にとっては盲点をつくような問い

が出されることを予想して、半ば期待し半ば恐れていた」西川は、こうした理解に対して「大変驚き」「啞然」「恐怖に似た感情」といった強い表現を交えながら自分の問題意識を説明するも（西川、2004：167・169）、2004年に出されたこの反論が韓国に紹介されたのは5年後のことであり⁵⁾、論争自体も不完全燃焼で終わってしまう⁶⁾。この途絶えてしまった論争を、というより、未発のまま終わった論争に再び火をつけて、違う方向に導いていくことが本稿の目的である。西川の議論に韓国の歴史的な経験を照らしあわせる形で、その熾烈な思惟の痕跡を一回は「ゆっくりめくってみる」ことを提案したい。以下、本稿では国民国家に関する西川の理論を「ボナパルティズム」と「私論」を中心に検討するが、それはとりわけ植民地朝鮮の経験のある新たな闘争の場に牽引していく試みでもある。

おそらく韓国における西川批判の背後には、帝国主義に乗りだすも、敗戦後には民主主義国家を自任する日本に比して、朝鮮は植民地となり分断を強いられたという、近現代における日本と韓国の異なる歩みを重視しようとする姿勢があると思われる。「国家装置のモジュール性」を論ずる西川の視点にはそうした姿勢が欠如しているため、そこからしかるべき方向性を見出すこともできないというのだ。「国民国家「以後」については青写真を提示していない」（李明元、2002：327）とか「国民国家の外側に潜っていく可能性を探しだそうとするものの、ただその可能性の探索を喚起するに止まる」（李得宰、2003：268）といった批判がつねに西川につきまとう⁷⁾。ここには、いわゆる「ポストモダニズム」に向けられたのと同様の疑惑が存在する。

しかしながら、西川にとって国民国家とは単なるフィクションや虚像ではなく、もろもろの矛盾と葛藤が重なりあう闘争の場であったと思われる。西川が最後まで決りだそうとしたのは、国民国家の構造的完結性というより、むしろその拮抗と錯綜の様相だったのではないか。朝鮮は日本の植民地になることでその支配圏に包摂されるも、同時に排除すべき対象となる。独立後、朝鮮半島に樹立される二つの国民国家は、あらゆるところに刻まれている帝国日本の痕跡に今も苦しんでいる。要するに、日本と韓国は互いが互いの国民国家における自己同一性を歪める存在でありつづけてきたのだ。だとすれば、「国民国家論」を韓国の現状に当てはめてその適合性を問う以前に、まず「国民国家論」を介して帝国と植民地の狭間における軋みのありように照準をあわせてみる必要がある。

代案の不在という批判について、西川はすでに「代案があろうがなかろうが、不正や抑圧に対しては反対の声をあげなければならないし、耐えがたいものに対しては批判の声をあげなければならない。身に迫った危険に対して、あなたは代案が作れるまで待てと言うのか」（西川、2000a：110）と応答したことがある。安易な代案の提示より問題提起の重要性を力説する西川の立場に、私は完全に同意する。正しい問題提起には、すでに正しい解答が含まれているはずだ。

2. 「ボナパルティズム論」とならず者

90年代以後「国民国家論」は、日本の人文社会科学における中心的な論争の対象になってきたものの、意外と論争の火つけ役でもあった西川本人の思想的履歴に関する検討は少なかったように思われる。とりわけ「ボナパルティズム論」は、西川の最初の研究課題であったばかりでなく、以後の「国民国家論」はもちろん、「〈新〉植民地主義論」や「私文化」「私論」などに

おける問題意識をも規定するものであった。言うなれば、驚くべきことに1960年のデビュー論文「スタンダールのボナパルティズム」以来、晩年の「私論」に至るまで——その間の情勢の変化と理論の深化による、まさに「怪物」⁸⁾的な思想の変奏にもかかわらず——一貫した問題意識が底流をなしていたのである。「国民国家論」とは、この「ボナパルティズム論」から「私論」に展開していく思考の熟練過程における一つの産物だといえよう。したがって「国民国家論」に対する考察は、なによりもまずこうした西川思想の全体像を把握するところからはじめなければならない。

西川のボナパルティズム研究の出発点となったのは、戦後デモクラシーに対する疑問とマルクス主義の教条主義的側面への抵抗感であった。西川にとって、スタンダールの『赤と黒』の主人公ジュリアン・ソレルが「全社会を相手に闘う」一方で「ナポレオンの思い出」に支えられてもいる、という矛盾は、既往の戦後デモクラシーやマルクス主義的な図式——「急進的な自由主義者」スタンダール／「憎むべき独裁者」ナポレオン——では決して解きえないものであった（西川、2013：174-175）。この疑問は、輝かしいフランスの革命史から進歩・自由・平等の概念をとりだす代わりに、「現在われわれが依然として悩み苦しんでいる現代の諸問題が形成されてゆく過程」「したがってわれわれ自身の形成過程」や「天皇制」を捉えなおす作業に西川を向かわせた（西川、1984：6・4）。

「ボナパルティズム論」の具体的な内容と意義、そして「国民国家論」との関連については、すでに今西一によるすぐれた文章がある（今西、2000）。ここでは、今西の整理に沿いながら要点だけを述べておこう。従来、ボナパルティズムに関する研究は、講座派の影響の下、ブルジョアとプロレタリアの階級「均衡論」、または「例外国家論」として理解されてきた。そのような視座は、先述したボナパルティズムの奇妙な性格ゆえに考案されたものであろうが、西川は「例外」という言葉から「理論の破綻」を読みとり、逆にボナパルティズムを近代ブルジョア国家における一つの典型として把握する視点を打ち出す。「ブルジョア〔資本主義〕国家というものは、諸階級の均衡と超越的な権力という欺瞞的な形態の方をむしろ常態としているので」あり、「巨大な国家装置」をはじめ「近代ブルジョア国家の本質的な特徴を示す国家が、例外国家であるはずがない〔傍点は原文。以下同〕」という（西川、1984：13・11-12）⁹⁾。

すなわち、西川は「ボナパルティズム論」を通して近代に対する既存の見方を決定的に塗り替えようとしたともいえようが、その根底にはK・マルクスの再読が据えられていた。この再読こそ、西川思想の骨格を構成するものだと思う。

西川は、日本のマルクス主義における「不幸」として、1852年の『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』でマルクスが行った「貴重な考察」、つまり「国家装置や代表理論」に関する考察が受け継がれなかった点を挙げる（西川、2000a：81）。このマルクスの国家論に対する関心の低さから、西川は日本のマルクス主義が袋小路に追い込まれた一つの原因を探る。西川によれば、マルクスの国家論には三つの段階があり、それぞれの内容と背後を見分けることが大事である¹⁰⁾。そして——まるでL・アルチュセールがそうしたように——マルクスの国家論における根本的な「断絶」を設ける。その断絶とは、いわば「国民国家のイデオロギー諸装置」についてのマルクスの自覚に他ならない。

膨大な官僚・軍事組織をもち、多くの層に分かれた精巧な国家機構をもったこの執行権力、五〇万の軍隊とならぶもう五〇万の官僚軍、網の目のようにフランス社会の肉体にからみついて、その毛穴をふさいでいるこの恐ろしい寄生体……（マルクス、1852：192-193）

「性急な革命幻想」が「ルイ・ボナパルトの登場によって無残に粉碎された」とき（西川、2000b：474）、マルクスはようやく国家を単なる支配階級の事務所などではなく、「恐ろしい寄生体」と認識しはじめたのである。したがって、プロレタリア革命の目標も、国家機構の掌握から、「網の目のように」「社会の肉体にからみついて」いる「国家装置（議会、軍隊、警察、司法、等々）そのものの根本的な変革と解体」（西川、2000a：91）に赴かねばならない。

ところで、ここで注意すべきなのは、こうしたイデオロギー装置としての国家が、独裁勢力の一方的な暴力やアジェーションではなく、普通選挙を通した民衆の「合意」にもとづいているという点である。「例外国家という規定を退けて、ボナパルティズムをブルジョア国家の強力な一形態」と考えなければならない理由はここにある。ボナパルティズムに対する民衆の支持をまともに検討せずに、ただ「凡庸で滑稽な一人物」に民衆が欺かれていたとする見解は、民衆を「ボナパルト以上に「凡庸で滑稽な」存在」と見下す結論に至らざるをえない（西川、1984：84・90）。

なんで生計を立てているのかも、どんな素性の人間かもはっきりしない、おちぶれた放蕩者とか、ぐれて冒険的な生活を送っているブルジョアの弟子とかのほか、浮浪人、兵隊くずれ、前科者、逃亡した漕役囚、ペてん師、香具師、ラツァローニ、すり、手品師、ばくち打ち、ぜげん、女郎屋の亭主、荷かつぎ人夫、売文文士、風琴ひき、くず屋、鋏とぎ屋、いかけ屋、乞食、要するに、はっきりしない、ばらばらになった、あちらこちらとゆれ動く大衆、フランス人がラ・ボエムとよんでいる連中、こういう自分と似たりよったりの分子で、ボナパルトは十二月十日会の中核をつくった。……ルンペン・プロレタリアートの首領におさまったボナパルト、……あらゆる階級のこれらのくず、ごみ、かすこそ自分が無条件にたよることのできる唯一の階級だと認めているボナパルト……（マルクス、1852：154-155）

周知のように、歴史学や文学の関係をめぐって色川大吉と西川の間で繰り広げられた論争の争点は、このマルクスの民衆観に対する解釈におかれていた。このくんだりから色川は「歴史叙述の模範」を、西川は「民衆に対するある種の蔑視」を読みとる。西川は、ルイ・ボナパルト、およびかれを支持した民衆を総じて「ルンペン・プロレタリアート」「くず、ごみ、かす」などと貶めるマルクスの視線には、「民衆の「底辺の意識」」に対する配慮が欠けていたと主張する（西川、1978：46）。

マルクスが歴史家としてこれらのくずやごみに侮蔑的な視線をなげかけるのは、マルクスの個人的な好みは別として、これらのくずやごみがマルクスの史観のなかで、したがって対象となるべき社会構成体のなかで重要な、そして肯定的な役割をはたしえないからであ

ろう。つまり歴史の価値体系のなかでこれらのくずやごみはまさしくくずやごみでしかないのである。（西川，1978：48）

西川の「ボナパルティズム論」は、このようにマルクス主義歴史学によって「社会構成体」から放逐された「くずやごみ」を、歴史の中心的な舞台に復権させようとする意図を孕んでいた。この「くずやごみ」と並んで「無器用で狡猾、ならず者的で素朴、愚鈍な崇高さ、打算的な迷信、悲愴な茶番、独創的でとんまな時代錯誤、世界的な悪ふざけ、文明人の知力では解きえない象形文字」をもって「文明のなかで野蛮を代表する」とされる「農民」は（マルクス，1850：41）、「議会主義的な政治過程」と「資本主義の進展」における「犠牲者」として「二重の疎外」を被っているものの、それゆえに「異質の急進性」を備える（西川，1984：185）。以後、西川のマルクス再読は、これら「ならず者」たち、とりもなおさず「非国民」¹¹⁾の存在とその可能性の探求に導かれていく。

ここで、植民地朝鮮の民衆がおかれていた状況について簡単に触れておきたい。1910年の併合以来、植民地朝鮮に「国家のイデオロギー諸装置」が帝国日本によって導入される。それは近代的合理性という名の下で、法や経済、政治や日常などあらゆる領域の再編をもたらした。ただし、植民地朝鮮の場合には、帝国憲法が適用されず（「議会主義的な政治過程」）、不完全な市場経済の形成（「資本主義の進展」）に加えて、「外地」の被植民者という、いわば「三重の疎外」を強いられていた。植民地朝鮮の人びとは帝国の「臣民」になると同時に、「不逞鮮人」（「非国民」）として弾圧される危険性に否応なくさらされざるをえなかったのである。

西川は「大日本帝国の歴史は、国民の拡張と非国民の抑圧の歴史」（西川，2002：151）であると断ずる。国民国家がその原初的な暴力性を剥きだしにする戒厳令の下で、関東大震災のときに起こった無残な虐殺と、その後の習志野収容所における朝鮮人たちの姿は、まさに「生まれたのが不運」（金杭，2010：176）な存在、もしくは「生きた死体」（黄鎬徳，2012：64）に他ならなかった。「酔つた揚句に所持金を遣ひ果し鮮人女給が盗つたと身体検査」「落ち穂を拾つた鮮女を泥棒と罵り足蹴にしたため遂に流産す」¹²⁾。かようなむごたらしい事例は、「くずやごみ」同様の待遇を朝鮮人たちが日常的に受けていたことを物語る。

3. アナーキーと階級闘争

3. 1 プルードンの憂鬱

それでは、「非国民」における「異質な急進性」、もしくはかれらがもっていたという「強烈な代案」（西川，2002：140）とはいかなるものだろうか。この点を明らかにするためには、アルチュセールのイデオロギー論と主体論を経由しつつ「私論」を検討する必要があるが、その前に確認しておくべき思想家がいる。P・J・プルードンである。

西川の「ボナパルティズム論」には隠れた、しかしもっとも重要なテーマがあるが、それはプルードンの「憂鬱」とかれの「反国家主義」の思想である。1972年にアルチュセールの「イデオロギーと国家のイデオロギー装置——探求のためのノート」を翻訳し、翌年「ボナパルティズム概念の再検討」を発表した西川は、1974年「反国家主義の思想と論理——プルードンとボ

ナパルティズム』を『ブルードン研究』（河野健二編, 岩波書店）に載せる。当時の西川の方法は、アルチュセールの議論を軸として、ボナパルティズムをめぐるマルクスとブルードンの思想を考究することだったと思われるが、その過程でマルクスとブルードンの理論的な和解が図られる。ただ『貧困の哲学』と『哲学の貧困』に象徴される両者の対立を仲裁することは、「はるかにマルクス主義者」（今西, 2000:151）である西川の姿勢と少しも矛盾するものではなかった。「わが国のマルクス主義を、したがってわが国の革命思想を、豊かな生命力にあふれた思想に鍛えあげるためには、自己のうちに、自己の真の敵対者の視点を築きあげるといふ、きわめて逆説的な作業が必要であろう」（西川, 1984:191）。

西川は、二月革命とクーデタに直面しながら紡ぎだされるブルードンの思想的営為を用心深く検討しつつ、マルクスとは違ってルイ・ボナパルトのクーデタを「ネガティブな形でおこなわれた社会革命」とみなす点にかれの卓越性があったという。そもそも「革命にたいする不信とペシミズム」を抱いていたブルードンにとって、「帝政は二月革命の完全な否定ではなく二月革命の矛盾の拡大・深化」にすぎなかった（西川, 1984:214・195・199）。この情勢認識と歴史観こそブルードンとマルクスを区別する境目であり、ブルードンを読みなおさねばならない理由にもなる。

要するに、ブルードンにとって大事なことは、帝政を単なる打倒の対象として位置づける観点を拒みながら、むしろ帝政の原理を極限まで推し進めることであったといえる。ルイ・ボナパルトを批判したかどで獄中に入れられたブルードンが、それでもなお、ボナパルトとの協力を強調したのはそのためであろう。ボナパルティズムを全体主義にすぎないと片づけ、それに代わる理念——真の民主主義、社会主義、共産主義……——を対峙させることは、実はさほど難しくない。より難しい実践があるとすれば、それは全体主義から目を背けずに、全体主義の中核にとりかかり、そこを潜り抜ける道を探ることだろう。クーデタと帝政はネガティブなものだが、そこには民衆の願望が託されてもいる。だとすれば、「社会主義者のとるべき戦術」も、ボナパルティズムにおける民衆的な側面が貫徹されるよう、「計算された反対によって、ルイ・ボナパルトの仕事を助け、権力の崩壊に到らしめる」両義性を帯びたものにならねばならない。デモクラシーとボナパルティズムによって「二重に欺かれた」民衆にのしかかる疎外の構造を明らかにしながら、革命を本来の正しい方向に軌道修正し「プロレタリア自身の力」に立脚した社会を建設することは、そのような実践を通じてのみ可能となるのだ（西川, 1984:218・185・215）。

しかし、民衆は他方で権力志向的な性格を有していて、クーデタの共犯者でもあった。西川にならっていえば、ブルードンは「人民の自発性のアприオリな無条件の支持」を拒否し、「人民＝プロレタリアートのなかに身をおきながら人民＝プロレタリアートを彼らとともに超越する」方法を模索していた。それが「共同体と所有との総合である」「第三の社会形態」、すなわち「アナルシー」の概念である。この「アナルシー」は「自由」の精神に立脚するものの、そこには「強烈な自由の意識が、かえって自由の独裁を許さず、均衡（＝秩序と調和）の上になりたつ穏和な社会を要求するという」「ブルードン的な逆説」が秘められていた（西川, 1984:238・242・247・258）。

われわれは本来、自由の感覚も自由という概念も欠如した、そして「社会」の末端にまで「国家」の原理の貫徹した、本来きわめて権威主義的な構造をもつ日本の社会に、ブルードンを欠いたマルクスが移入された際に起る思想的な歪みとそれがもたらす不幸な結果について語ることができる。自由の絶対化さえこぼむ自由主義は、わが国の社会にもっとも欠けたものであった。（西川、1984：266）

西川がブルードンの読解を通じて獲得したこの「自由主義」の観点は、「政治的中心はいたるところにあるが、その中心によって描く円周はどこにもない」「世界のあらゆる立法はすべて一致するようになる。もはや政治的意味における国籍や祖国は存在せず、ただ出生の土地があるだけとなる」などのブルードンの言葉が引用されていることから予想できるように（西川、1984：256・259-260）、以後の「瞬間の共同体」¹³⁾への関心につながっていく。

ブルードンを単なるアナキストではなく科学的社会主義者として捉えなおし、その「連合主義」を高く評価する西川の方法論は、急変する情勢において「〈事物の必然〉、すなわち状況は熟しているが、それを導く理念は未熟である」「理念よりも先に現れた事実」という厳しい現実立ち向かわされたブルードンの「憂鬱」と「孤立」を前提にしている（西川、1984：192）。こうした側面への注目は、おそらく西川自身がパリ5月革命の渦中にいながら同様な経験をしたためであろう（または敗戦と引き揚げの経験か）。「出来事」としての革命が眼前に迫り、それを説明しようとするも、どの言葉を用いても理不尽に陥ってしまうときの憂鬱。前の時代が崩壊しつつあるのに、後の時代が予測できない切れ目に立つ者の孤独感。ブルードンから「見えすぎた者の悲哀」（西川、1984：193）を感じとる西川の指摘は、マキャヴェリから「後者の伝統がすべてを覆い尽くしてしまう前に、前者の伝統から自由になったこと」の「孤独」を炙りだすアルチュセールの指摘ときわめて類似している（アルチュセール、1998：416）。西川とアルチュセールの関係を学問的な影響の強度だけでなく、この「孤独」の共鳴という視座から論ずることはできないだろうか。

3. 2 アルチュセールの孤独

西川の「ボナパルティズム論」や「国民国家論」に多くの影響を与えたアルチュセールの「イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」（以下「装置」と略す）は、西川の指摘通り「『五月』への応答」として書かれたものである。アルチュセールの議論のなかでも特殊な位置を付与されてきたこの論考は、しかし一方では「構造主義者」アルチュセールのイメージを強化するものでもあった。イデオロギーに対する主体の隷属化の様相を分析する点で、たしかに「装置」は構造主義との親和性を有している。ただ、この論文が、「五月」という「出来事」の予期されぬ突出によって、「あたかも啓示のように訪れた精神的高揚の中で、五月に続いて現われるであろう革命と新しい世界のイメージにとらわれて」執筆されたことを忘れてはならない（西川、2011：371・369）。

周知のように、「装置」におけるアルチュセールの主張の核心は、個人が——「国家の抑圧装置」（政府、行政機関、軍隊など）と区分される——「国家のイデオロギー諸装置」（学校、教会、家庭、新聞、ラジオ、文学、美術など）によって主体化することで、社会構成体の生産関係の

再生産——搾取や支配の過程——に隷属していく点にある。イデオロギーの諸装置は個人をある主体として呼びかけるが、それによって呼びかけられた個人は自分に与えられた各々の位置に固定され、そこを己の本来的な居場所であるかのように受け止める。男性・女性・韓国人・日本人・信仰者・学生など、もしくはならず者のような社会の「くずやごみ」といったあらゆる主体は、このようなイデオロギーの「呼びかけ」による「想像的同一視」の効果であるという（アルチュセール、1970）。

すなわち、イデオロギーのイデオロギー的表象は、あらゆる「主体」が、つまり一つの「意識」を与えられ、しかもその「意識」が主体に注入し、また自由に受け入れている諸「観念」を信じるあらゆる「主体」が、「自分の観念に従って行動」しなければならず、したがって自分自身もつ自由な主体という諸観念を、自分の物質的な実践の諸行為のなかに刻みこまなければならないということを、自ら認めるように強いられているのである。（アルチュセール、1970：223）

主体がイデオロギーによる呼びかけの効果である以上、もはやアイデンティティが自動的に保証され成立することはありえなくなる。こうした主張がその後のフランス現代哲学、および「ポストモダニズム」にもたらした影響に関しては再三述べるまでもなからう。

さて、ここで注目したいのは、「呼びかけ」の形式と、それに応答する主体の様態である。イデオロギーの呼びかけに関するもっとも有名な例は、警官の「おい、おまえ、そこのおまえだ！」という職務質問の場合である。警官に呼びかけられると、ほとんどの人は無意識のうちに振り向いてしまう。「このような一八〇度の単純な物理的回転によって、この個人は主体になる。なぜか？なぜなら彼は呼びかけが「まさしく」彼に向かってなされており、また「呼びかけられたのはまさしく彼である」（そして別の者ではない）ということを読めたからである」（アルチュセール、1970：232・233）。つまり主体化の過程とは、イデオロギーによる呼びかけと、それへの個人の応答を通して行われるのである。

ところで、この個人はそもそもなぜ警官の呼びかけに振り向くのか。個人をして、警官の呼びかけが他でもない「自分」に向けられていると確信させるものとは一体何であるのか。「言葉による呼びかけであろうと、呼子の一吹きであろうと、呼びかけられた当人はつねに、呼びかけられたのは自分だと知っている。しかしながらこれは奇妙な現象であり、「自分にやましいところのある」人びとがいかに大勢いるとしても、「罪の意識」だけでは説明できない現象である」（アルチュセール、1970：233）。この主体化以前の個人とはだれか、個人を振り向かせる無意識とはなにか、といった問いをめぐって多くの論争が行われてきたが¹⁴⁾、それに対するアルチュセールの答えはつぎのとおりである。主体化以前の個人というものは存在しない。

アルチュセールは、個人が自らをある主体として認めることを「イデオロギー的な再認の機能」が働いた結果だと説明する。「再認」とは、個人が主体であることを主体として再び認める、言い換えれば「主体として主体になる」ことをいう。警官の呼びかけそのものがすでに「主体」に発せられているのであり、個人はまた「主体」としてそれに応答するというのだ。

いまやわれわれは、かつてわれわれがイデオロギーの機能を描き出すなかで用いた時間性の形態は削除して、イデオロギーはつねに—すでに主体としての諸個人に呼びかけてきた、と言わなければならない。そしてこのことは結局、諸個人はつねに—すでに主体として、イデオロギーによって呼びかけられているということを明確化することになる。そしてそのことは必然的にわれわれを、諸個人はつねに—すでに主体である、という最後の命題に導く。（アルチュセール、1970：235）

この引用文において、「時間性の削除」という表現は大きな意味をもっている。それまでのイデオロギーに関する通説では、ある原初的な存在として想定される個人（本当の自分、無意識、「非／存在」云々）がいて、それにイデオロギー的な圧力がかかることで、虚像としての主体が作られるとみなされてきた。つまり時間的に先立つ個人が、イデオロギーの働きかけの後に、人為的な主体になるという前後関係が下敷きになっていたのである。これに対してアルチュセールは、時間性をとり除くことで、主体化以前に存在する無垢な個人という観念を抹消する。そのような個人は、主体化による想像の産物を真の自己だと錯覚した結果でしか存在しえない。それは起源と出自、誕生に対する偽りの欲望を生みだしてしまう¹⁵⁾。西川が「私は、原風景あるいは原体験の表象を、固定され、動かない何かだと考えてはならない、と思います」（西川、2013：245）と述べたことも、おそらくこのアルチュセールの考えに近いものだと思う。主体が虚像であるのと全く同様の理由で、イデオロギーに汚染される前の純粋な自分というものも虚像であるほかない。

しかし、だとすれば、われわれはどのように国家のイデオロギーに抗えばいいのか。私たちが「つねに—すでに」国家のイデオロギーに染められている存在であり、それと違う状態を想定することができないとするなら、あらゆる抵抗の試みも「つねに—すでに」不可能に陥ってしまっているのではないか。アルチュセールによれば、私たちは母親の子宮のなかにいたときからすでに「主体」である。そのため、アルチュセールの議論に浴びせられた批判は、主に「機能主義」的な側面、そして「階級闘争のいかなる可能性も排除」する点に集中されてきた（アルチュセール、1976：138）。こうした批判は、冒頭で述べた韓国の西川批判——イデオロギー万能主義、代案の不在——や、日本の「国民国家論」批判¹⁶⁾に見られる内容とすこぶる似ている。

アルチュセールは、かかる批判への反批判として、「支配的イデオロギーとは」「きわめて長く厳しい階級闘争の結果である」と述べつつ、自分の立場は「階級闘争の優位を肯定する」ものだと断言する（アルチュセール、1976：139）。イデオロギーが階級闘争の結果であるということは、おそらく個人と主体における前後関係の逆転、つまり個人は主体の原因ではなく主体化の結果であるという逆転と対をなしている。イデオロギーによる支配が先行していて、それに抗する闘争があるとすれば——西川のブルドン読解からみたように——そのイデオロギーに代わる新たな理念を提示することができよう。ただし、もろもろの抵抗や葛藤が重層的に重なりあう結果が支配のイデオロギーならば——それがわれわれに事後的に原因・起源として認識される——イデオロギーによる支配には「つねに—すでに」そうした闘争の痕跡が刻まれていることになる¹⁷⁾。

「国民国家論」は拘束性を強調するあまり外部を想定しえなくなるという批判は、この点とか

かっている。しかしながら、牧原憲夫が述べるように、「簡単に〈そと〉に出られるなら、ことさらに論議する必要もない」（牧原，2000：32）。アルチュセールは、イデオロギーには歴史も外部もないという。「それは社会の歴史的な生命活動に本質的な一つの構造である」（アルチュセール，1965：413）。国家はイデオロギー諸装置を用いて、公的な領域はもちろん、私的な領域すべてを包み込む。そしてその支配のイデオロギーには抵抗と闘争が含まれているから、むしろ「階級闘争」は、あらゆる私的な領域において埋もれているその痕跡を発見することになるだろう。したがって、西川が植民地主義をとりあげて述べているように、この闘争は「言語や概念、感覚、味覚や匂い」（西川，2010：6）といった日常生活や身体性との至難な戦いを含まざるをえない。

アルチュセールは、そのような「無言のままに押さえつけられていた闘いを目に見えるものとした」（アルチュセール，1976：142）5月革命を、政治と理論の齟齬による沈黙のなかでみつめていた¹⁸⁾。国家のイデオロギー諸装置と階級革命のテーゼは、出来事に直面した孤独な知的営為の結果であったといえる。ただ、一方でアルチュセールは、5月革命は「無媒介な出来事」であったため、「反抗をその力量と見合った水準へ引き戻す」必要があると述べる（アルチュセール，1976：142）。ここに西川とアルチュセールの間における重大な分かれ目があると思われる。

4. 「私論」と「植民地公共性」

ところでアルチュセールは、「装置」において「主体」を二種類に区別している。「かくあれかし [アーメン]！」と己に対する服従の要求を自然なものとして受け入れる「大多数の（善き）諸主体」と、「時には国家（の抑圧）装置からなんらかの別働隊の介入を誘発する「悪しき諸主体」がそれである（アルチュセール，1970：243）。この「悪しき諸主体」に対するアルチュセールの詳細な説明がないため、具体的にどのようなものを指し示しているのかは不明であるが、「なんらかの別働隊の介入を誘発する」という表現から、イデオロギー諸装置の範囲を超過するあるものとして想定されていることはたしかであろう。

さらに「イデオロギーは外部をもたない」（アルチュセール，1970：234）という命題を考えあわせると、この「悪しき諸主体」とは、イデオロギーに捕らわれていながらイデオロギー諸装置に攪乱をもたらす存在だと推測することができる。換言すれば、「悪しき諸主体」はイデオロギーをその内部において機能不全に陥らせるため、私的領域を超える公権力の介入を惹起する。転倒した形とはいえ、「悪しき諸主体」は公的領域と対面することで、その暴力性を曝しだす存在となる。

アルチュセールは「悪しき諸主体」の存在を指摘はするものの、あくまでも考察の重要な対象は「大多数の（善き）諸主体」になっている。その「大多数の（善き）諸主体」像に比べて「悪しき諸主体」の様態を推測すれば、イデオロギーの呼びかけと主体化という「芝居」（アルチュセール，1970：237）において己の役割を引き受けなため、ないしは異なる役割を演じるため、それは生産関係の再生産への参加が拒否される存在となる。いわばこれは「くずやごみ」として、西川が描いた「非国民」の形象を体現するものなのだ。5月革命のさいに西川が目撃したのは、この「悪しき諸主体」の噴出ではなかったのか。西川にとって5月革命とは、「私」が語り始

めた最初の革命」であり、「既成の革命概念」や「用語」で説明することができないものであった（西川，2011：9）。アルチュセールはこうした5月革命の特徴を「無媒介」として否定的に捉えるが、西川にとってはむしろこの「無媒介」こそ5月革命の魅力である。

六八年五月は、容認されたあるいは期待された社会的諸形態を根底から揺るがせる祝祭のように、不意に訪れた幸福な出会いの中で、爆発的なコミュニケーションが、言いかえれば各人に階級や年齢、性や文化の相違をこえて、初対面の人と彼らがまさしく見なれた——未知の人であるがゆえにすでに仲のいい友人のようにして付き合うことができるような、そんな関係が、企ても謀議もなしに発現しうる（発現の通常の諸形態をはるかにこえて発現する）のだということをはっきりと示して見せた。……だからこそ権威は覆され、あるいはほとんど無視され、いかなるイデオロギーもそれを取り込んだり自分のものだと主張したりすることのできない、未だ嘗て生きられたことのなかった共産主義の一形態がここに出現したのだと、人びとは感じることができたのだ。（ブランシヨ，1983：64—66）

西川は、5月革命の意義をこのM・ブランシヨの文章を引用しながら説明する。「私論」は、言葉の一般的な意味とは違って、「個々人の差異に関心」を寄せるものではなく、この「共に在ることの可能性」を探索する試みといえる（西川，2011：452）。ここで西川がブルードンから読みとった「連合主義」の精神を発見することは見当違いではないだろう¹⁹⁾。「私論」とは、未だ存在したことのない「共産主義の一形態」、つまりイデオロギーの再生産の循環を歪めつつ新たな「公共性」を宣言する「悪しき諸主体」の実践だといえよう²⁰⁾。

西川が描くこの「公共性」の萌芽を——西川は国民国家のイデオロギーと深くかかわっている「公共性」という言葉を好まないだろうが²¹⁾——われわれは意外にも植民地朝鮮で発見することができるかもしれない。政治が存在しない植民地から「公共性」の様子を探ろうとすることは、もちろん矛盾に満ちている。植民地朝鮮において公共の領域を掌握していたのは帝国日本と総督府の権力であり、朝鮮人たちの公共への参加は厳しく制限された形でしか行われず、そこに市民社会というものが成立する余地もなかった。

ただし、帝国日本のイデオロギー諸装置は植民地朝鮮においても広汎な私的領域を創出したのであり、とりわけ植民地という特殊な状況において、私的領域での抗議は、ただちに植民地支配に対して「自由」を要求する動きに転回する可能性を秘めていた。たとえば、道庁の移転、電車の増設や運賃下げ、水道道の拡充、借家・借地制度の整備、孤児院の設立などをめぐる植民地朝鮮人たちの「公的要求」は、つねに差別撤廃運動を同伴していたのである（尹海東編，2010）。帝国の位階秩序において「二等国民」「非国民」にならざるをえない被植民者たちの「公共性」に対する希求は、帝国イデオロギーのジレンマを暴露する機能をも兼ね備える。その要求は、しかし不在である「公共性」に訴えるものであったため、それぞれの文脈によって変容する流動性を帯びていた。

紙面上、植民地朝鮮におけるこうした公的な闘争の様子を詳しく素描する余裕はない。その代りに、ここでは尹海東の議論を紹介することにした。尹は、植民地朝鮮における公的要求とそれがもつ意義を西欧市民社会的な「公共性」と区別するため「植民地公共性」の概念を提

示する。抵抗と協力が交差する地点に存在するこの「植民地公共性」は、未だ存在したことの無い「公共性」の構成を目論むしかなく、したがって隠喩としての性格をもつ。

植民地においても、私的利害を反映することで共通の利害を確保する、といった意図からこしらえた公共の価値、または公共の領域が存在していたのである。これまでこうした領域は、ごく瑣末な残余の部分としてのみ認識されてきた。植民地公共性は、公共性の言説をめぐって競合した実体的空間を対象にするのではなく、むしろ公共性の言説が国家や民族といった上位の価値に専有されることによって無視されてしまった残余の領域、とりもなおさず、構造的な解釈の不在の領域における溝を埋め立てるためのものである。いうなれば、「公共という言葉がないところにこそ、植民地公共性は存在するのだ」。こうして、植民地公共性は植民地期における政治的なものを隠喩する。この規定を下敷きにしつつ、植民地公共性を、植民地の住民たちにおける自由への志向を含みこむ積極的な契機として枠づけることもできよう。(尹, 2014: 195-196)

国民国家が存在しえない植民地において「公共性」を渴望することには、国家や民族などの概念に還元されない実に多種多様な願望が含まれている。日常領域でしか発現できない「植民地公共性」は、「三重の疎外」という状況ゆえに「その政治的な性格が極大化すると、すぐさま政治的抵抗運動に飛び火しうる」、まさに「異質な急進性」を孕んでいた。「被植民地民は、支配的な公共性の論理を受容しながらも、それが乗り越えられる機会を、いつも肩越しに窺っていたのだ。植民地における公共の領域と政治的な抵抗の領域が、さほど遠くない距離におかれていたのは、そのためである」(尹, 2014: 203)。

もちろん、5月革命と植民地朝鮮を同時に考えることはあまりにも乱暴な手法であり、西川が述べる「瞬間の共同体」と尹が主張する「植民地公共性」とを一括りにして論ずることも非常に強引な解釈にすぎない²²⁾。しかし「共同体」というものを隠喩として捉え、それを国民国家の枠組みに収まらない場所に設定しようとする両者の試みを比較検討することに、全く意義がないとも思えない。植民地朝鮮の経験、とりもなおさず「同化」と「差別」の呪縛のなかで行われた日常的な実践を、今日における「公共性」の模索に導いていく作業には、多くの思想史的な難関が待っているに違いない。植民地の「悪しき諸主体」によって編みだされる抵抗と協力の二重奏を「私論」に盛り込み、そこから日韓の国民国家を同時に捉えなおす視点を獲得する方法はないだろうか。今後も探求をつづけたい。

注

- 1) 『国民国家論の射程——あるいは〈国民〉という怪物について』(柏書房, 1998年)が、尹大石によって『国民이라는怪物』(ソミョン出版)というタイトルで訳された。
- 2) 評者は、西川を「ポストモダン」の思想家であり、「脱近代を夢見るニヒリストと超人の間に立つ」と紹介した後、「脱近代論」の立場をとるため「国家」が考察の対象から除外される点、近代的な思考と近代国家がなし遂げた「肯定的な結果」には沈黙を貫いている点、その方法論が「初歩的なもの」にすぎず、「国際関係に関する無知ないしは無視」を反映している点などを指摘する。さらに、西川の議論に「日本という国家の歴史的罪悪を近代国家の理性のせいにする巧妙な罫」が仕掛けられているとも

いう（李雄賢，2002）。

- 3) その具体的な過程と内容については、本誌収録の金杭「『私』からの国民国家批判——韓国における西川長夫受容を中心に」を参照。
- 4) たとえば、李明元は、西川の「国民国家論」がアンダーソンの「想像の共同体」を「認識論的な母胎」にしていると断じ、「帝國的民族主義」と「抵抗的民族主義」を同一視する著者の態度は「日本という特定の国民国家が歴史のなかで恣行したファシズム的な行動」をかばい立てする言説になりかねず、「日本の右翼知識人」たちに利用される危険性すらあると警戒する（李明元，2002：324-326）。李得宰は、より踏み込んだ読解をみせているものの、西川の議論をウォーラステインやホブズボームなどの垂流であるかのように分析し、最後には「非国民化の回路を模索することも重要だろうが、帝国に対抗する非帝国民の姿を回復することも大事ではなからうか」と、A・ネグリとM・ハートの議論にまで飛躍する。そして「国民国家の相同性」を論ずる西川の理論は「無意味」に陥るだろうとも述べる（李得宰，2003：277・274、この書評は2004年10月に『立命館言語文化研究』16巻2号に日本語で転載された）。
- 5) 西川の反論は2009年9月『進歩評論』41号に韓国語で転載された。
- 6) もちろん、その後西川と韓国の研究者たちとの交流が増えていくにつれて、問題意識や方法論に関する共感が深まっていったのは事実である。とはいえ、2006年と2009年に3冊の著作が翻訳されるも（『増補 国境の越え方——国民国家論序説』（平凡社，2001年）が『国境을 넘는 방법：文化・文明・国民国家』（韓敬九 外 兪召，一潮閣，2006年）として、『〈新〉植民地主義論』が『新植民地主義論：글로벌화時代の植民地主義를 묻는다』（朴美貞 兪召，一潮閣，2009年）として、『地球時代の民族＝文化理論——脱「国民文化」のために』（新曜社，1995年）が『国民을 그만두는 방법：国家이데올로기로서의 民族과 文化』（尹海東 外 兪召，歴史批評社，2009年）としてそれぞれ訳された。なお、『植民地主義の時代を生きて』（平凡社，2013年）が現在翻訳中であるとの話を聞いている）、もはや書評ができることはなく、直接的な反応を引きだすこともなかったように思われる。
- 7) 洪閔基は「市民」と「愛国」の関係を考察する論文において、西川の議論を長く説明しつつも、国民国家に対する代案の提示が回避されているといい、また「『国民国家以後』に展開すべきより肯定的な「世界秩序」の構想、つまりハーバーマスの「ポストナショナル形勢 post-nationale Konstellation」に対する注目につながっていかない点」を指摘する（洪，2004：278—279）。なぜ西川が自分の議論をハーバーマスにつないでいかなければならないのか、私には理解できなかったが（西川のハーバーマス批判については、西川（2006）の第六章「多文化主義から見た公共性問題——公共性再定義のために」を参照）、おそらく洪にとって西川の国民国家論とは、結局のところ「民族というものはない」「国家は虚構だ」ということを主張するものにすぎず、かれはその議論自体が空虚であると考えたようである（洪，2004：291頁）。
- 8) 今西一は、西川における研究の幅と仕事の量に敬意を表する意味でかれを「怪物」と呼んだことがある（今西，2000：143）。
- 9) とりわけ、ボナパルティズムから民主主義の矛盾——なぜ当時のフランス民衆は議会主義的デモクラシーという「善」ではなく、「悪」である独裁を選んだのか——を指摘し、ファシズムとの親和性を強調する西川の先見性は注目に値すると思われる。柄谷行人はフロイトの概念などを用いてボナパルティズムを分析したことがあるが（柄谷，1996）、その問題意識は西川とほとんど変わらないといえる（西川の柄谷に対する評価については、西川（2013：173 - 186）を参照）。ただし、当時の西川の議論には、民主主義がブルジョアのイデオロギーとして利用される点と、民主主義そのものが内蔵する矛盾への指摘が混在している。この両者——民主主義の悪用と民主主義の矛盾——の間には相当な隔たりがあるが、以後の西川においてその問題が詳しく検討されることはあまりなかったように思われる。ボナパルティズムと民主主義の問題は、日本の天皇制だけでなく、韓国の軍事独裁などを考える上にもすこぶる重要な観点を提供するだろう。今後の課題にしたい。
- 10) 第一期は「人間的解放」が論じられた「初期の疎外論」の段階（1843～44年）、第二期は「史的唯

物論」と「革命理論」の提唱から国家を「ブルジョア階級全体の共同委員会にすぎない」と捉える「国家死滅論」の段階（1845～50年）、第三期は安易な革命理論が退けられ、「国家装置」の問題から「はじめて国民国家を正面から対象」に据えるようになる段階（1852～71年）である（西川，2000a：87-94）。

- 11) 「非国民」については、西川（1999）を参照。
- 12) 朝鮮憲兵隊司令部編「植民地下の朝鮮人差別の事例」1933年（引用は趙景達他編，2011：355・356）。
- 13) 「瞬間の共同体」については、西川（2010：8-10）を参照。
- 14) アルチュセールの呼びかけ論、およびこの論争に対する詳細な説明として、崔ウォン（2011）を参照。
- 15) この点に関して崔ウォンは、アルチュセールにおける「発現」と「誕生」の概念上の差異に着目し、単線的な時間観によって起源の物語を構成する「誕生」に比べて、「発現」はもっぱら歴史における偶然性とその重層決定にかかわっていることを指摘する。アルチュセールの呼びかけと主体化の議論は、この「発現」の側面をとり扱うものだが、そのイデオロギー的な効果によって議論自体が「誕生」の問題に転回してしまったのである（崔ウォン，2011）。
- 16) たとえば、大門正克は「国民国家論」において「民衆は常に受身であり」、よって「せめぎあう関係、せめぎあう場への関心が弱く、国民国家システムの一方通行的な説明になりがちである」と指摘する（大門，2008：53）。かかる批判に対する反批判としては、今西（1999）、牧原憲夫（2000）を参照。なお、西川も含めて主に歴史学者を中心に行われた「国民国家論」の総括として、牧原編（2003）を参照。
- 17) 崔ウォンによれば、アルチュセールのこうした議論は、ある抵抗の主体を想定せざるをえない観念論を避けつつ、あくまでも唯物論的な闘争にこだわりつづけた結果である（崔ウォン，2011）。
- 18) アルチュセールと5月革命の関係については、西川（2011）の第四章「知識人の問題」を参照。
- 19) さらに西川は、アルチュセールからも——アルチュセールの意図に反して——「アナーキストの風貌」を見出す（西川，2011：373）。
- 20) このような西川の思惟は、たとえば大門が指摘する「強い個人」とはなんらの関係もない（大門，2008：57）。私の判断では、西川の「私論」は「生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独」を見極めようとする姿勢に裏打ちされている（西川，2001：345）。
- 21) 西川（2010）における発言を参照。
- 22) 両者の公共性論に対する議論は西川（2010）を参照。

参考文献

- K・マルクス（1850）「フランスにおける階級闘争——1848年から1850年まで」『マルクス＝エンゲルス全集』第7巻，大月書店，1961年
- （1852）「ルイ・ボナパルトのブリュメール八日」『マルクス＝エンゲルス全集』第8巻，1962年
- L・アルチュセール（1965）『マルクスのために』河野健二他訳，平凡社ライブラリー，1994年
- （1970）「イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」『再生産について』下，西川長夫他訳，平凡社ライブラリー，2010年
- （1976）「AIEにかんする注記」（1976）『再生産について』下
- （1998）『マキャヴェリの孤独』福井和美訳，藤原書店，2001年
- 西川長夫（1978）「歴史研究の方法と文学」『歴史学研究』第457号
- （1984）『フランスの近代とボナパルティズム』岩波書店
- （1999）「帝国の形成と国民化」同・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房
- （2000a）「戦後歴史学と国民国家論」歴史学研究会編『戦後歴史学再考——「国民史」を超えて』青木書店
- （2000b）「ボナパルティズム」的場昭弘他編『新マルクス学事典』弘文堂

- (2001) 『増補 国境の越え方——国民国家論序説』 平凡社
- (2002) 『戦争の世紀を越えて——グローバル化時代の国家・歴史・民族』 平凡社
- (2004) 「李得宰氏への手紙——『国民という怪物』に寄せられた書評「非『国民化』の回路はいかに可能か」に対する応答」『立命館言語文化研究』16巻2号
- (2006) 『〈新〉植民地主義論——グローバル化時代の植民地主義を問う』 平凡社
- (2010) 「〈対談〉日韓併合一〇〇年と「新植民地主義」——新しい政治倫理への対話」『東アジアの思想と文化』第3号
- (2011) 『バリ五月革命私論——転換点としての68年』 平凡社
- (2013) 『植民地主義の時代を生きて』 平凡社
- M・ブランショ (1983) 『明かしえぬ共同体』 西谷修訳, ちくま学芸文庫, 1997年
- 柄谷行人 (1996) 「表象と反復」『ルイ・ボナパルトのブリュメールー八日』 太田出版
- 今西一 (1999) 「国民国家論論争への所感」『立命館国際研究』12巻3号
- (2000) 「ボナパルティズム論から国民国家論へ——西川長夫の業績をめぐって」『立命館言語文化研究』12巻3号
- 牧原憲夫 (2000) 「国民国家における重層性と相互浸透をめぐって——『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』を読んで」『立命館言語文化研究』12巻2号
- 牧原憲夫編 (2003) 『〈私〉にとっての国民国家論——歴史研究者の井戸端談義』 日本経済評論社
- 李雄賢 (2002) 「사람을 ‘국민’ 으로 만들지 마라: 『国民이라는怪物』」『東亜日報』3月22日
- 李明元 (2002) 「怪物은 어떻게 자유로워지는가: 西川長夫 『国民이라는怪物』」『오늘의 文芸批評』45号
- 李得宰 (2003) 「非 ‘国民化’ 의 回路는 어떻게 可能한가」『進歩評論』18号
- 洪閔基 (2004) 「『市民』은 어떻게 愛國하는가」『사회와 哲學』7号
- 大門正克 (2008) 『歴史への問い／現在への問い』 校倉書房
- 金杭 (2010) 『帝国日本の闕——生と死のはざまに見る』 岩波書店
- (2015) 「『私』からの国民国家批判——韓国における西川長夫受容を中心に」『立命館言語文化研究』27巻1号
- 尹海東編 (2010) 『植民地 公共性: 実体와 隱喩의 距離』 체크ग्애함케
- 尹海東 (2014) 「植民地近代と公共性——変容する公共性の地平」島蘭進他編『宗教と公共空間——見直される宗教の役割』 東京大学出版会
- 趙景達他編 (2011) 『『韓国併合』100年を問う——『思想』特集・関係資料』 岩波書店
- 崔ウォン (2011) 「인생선인가, 呼名인가?: 슬로베니아 学派, 버틀러, 알튀세르」陳泰元 譯『알튀세르 効果』 그린비
- 黄鎬德 (2012) 「災難과 이웃, 關東大地震에서 福島까지: 植民地와 收容所, 金東煥의 叙事詩「国境의 밤」과 「昇天하는 青春」을 端緒로」『日本批評』第7号

